イベントスケジュール（言語表現学会）

言語表現学会の第２回研究発表会は、９月３０日（日）の予定です。あらかじめのご予定を！

研究発表会通信

第１号
２０１２年７月１３日
発行
兵庫教育大学　言語表現学会
研究発表会担当

研究発表会・総会特集

十二本の発表で盛会！

国語九本、英語四本、三会場で…

「警報が出ていても、学会は開催するのか！？」　少なくとも前夜の天候は、そんな不安を掻き立てるに充分だった。大雨洪水警報に雷・竜巻の注意報。しかし、一夜明ければ総てが杞憂…。

毎晩、一心に準備に取り組んできた発表者の方々の思いが通じたか？　遠来の修了生の会員も加えて、本年度の第一回研究発表会・総会は滞りなく終了した。秋の第二回研究発表会では、講演会も予定されている。ご期待を～！

【懇親会】山岡先生の乾杯前のスピーチ

懇親会の冒頭、乾杯前のスピーチに立たれた山岡先生の言によれば、学会の参加の仕方には三種類あるとのこと。発表する側と聞く側が存在するのは当然だが、「支える側」というスタッフに言い及ばれた後、乾杯の発声をされた。

主催する側の我田引水と笑われるかも知れないが、編集・運営委員、そして当日の各会場で運営に関わって下さった方々に感謝する次第。

【第一会場】
・司会　原　恵子
・機器　辻道真理子
・発表者　池嶋達矢
東崎雅樹
大谷順子
湯　佳美
大手壽之

【第二会場】
・司会　鬼束佳苗
・発表者　大濱さおり
内藤康輔
長谷川裕子
中西一彦

【第三会場】
・司会　山河　萌
・機器　岡田華奈
・発表者　坂詰由美
振角晴美
浅田智之
江原智子

【受付】
山田小百合
潘　振聡
岸本洋人
広岡正晃

【懇親会】
・司会　辻道真理子

そして、準備に関わって下さったM1の方々
【総会】
・議長　森本敦子
・監査　東崎雅樹

以上、当日、関わって下さった方々の名前等を記し、感謝の意にかえたい。

発表の質を高めることは発表者自身はもとより、学会として最も重要なことだろう。そして、それに加えて濃密な質疑応答が展開されることが、司会者をはじめとした当日スタッフの願いでもある。折に触れ、参加者が学会のことを、研究発表のことを思い出しながら、次への備えを確実なものとしていただきたいと思う。

◇　◇　◇

この言語表現学会のような形式だと、極端に言うと「さまざまな専門領域が混在する」ことになる。つまり、「言語」や「言語表現」を共通のキーワードとしてはいるものの、教育・文学・語学等々の専門領域から、発表者が登壇してくるのである。その意味で、限定的な分野・領域の学会とは異なる困難さを持っていると言えよう。

発表資料作成の方法一つにしても、それぞれが背景とする学会・研究会によって異なる。しかし、それぞれの専門分野の「しきたり」に準拠するとしても、資料を整えて発表に臨み、与えられた時間内で、最高のパフォーマンスを発揮することが求められる。

編集子の所属している学会、それも昔々の話で恐縮であるが、メモとチョークを握って登壇した学会長老の、いつ果てるとも分からぬ授業のような発表を聞かされた思い出は、未だに苦々しい傷として残っている。それらの暴挙を防止しようという思いで、「発表原稿は完全原稿で…」と我々の世代は訴え続けた。つまり…「そのまま、紀要に応募できる完全な原稿を提示して、発表に臨んで下さい」という悲しい規制でもあった。

学習指導案を作成する場合と同様かも知れない。素晴らしい学習指導案が、素晴らしい実践を保障するものではない。しかし、学習指導案一つを完璧に作成できない人間の実践に、一体、何を期待するというのか？

その意味で、まずは発表原稿を完全なものにすることが求められる。その部分を間違わねば、発表時間の厳守も苦にはならない。自分の発表を大切に思うなら、人の発表も大切にしなくてはならない。そういう心の余裕も湧いてくるはずである。

一生懸命に発表を続ける若者たちを見ながら、羨ましさを感じながら、「頑張れ！」というエールをおくり続けた。いつか、あなた方が研究を先導する時代がやってくる。そのひたむきさと、その取り組みの真摯さを忘れずに、今後の研究に邁進していただければと念ずる次第。次は九月！またお会いしましょう。

【受付】笑顔でお迎え

司会者の苦労
とっても大変なのだよ～！

所属学会で繰り返し司会を担当させられている編集子…「司会者の心境」は、痛いほど分かる。（一応はね～）

発表が終わって、「では、質疑応答に移ります。御意見・御質問がある方は～」と発言しながら、「頼む！」と会場に懇願の眼差しを投げる。続く沈黙…。状況を打破しなければならないと身構えるが、「盛り上げられる」との確信はない。

発表者を後押しできる質問を探しながら、自分自身がパニックに陥りかける。「いかん、いかん」（汗）

と立て直して、発言。今度は、「頼む！」と発表者に懇願の眼差しを投げる。

このタイミングのとり方はなかなか難しい…。

編集子のように長老化してしまうと（笑）、「＊＊先生は、こういう分野に造詣が深いですよね。一言、お願いできますか？」と振るのだけれど、これには「年季」が必要かも！？

まずは、「御発表を伺っていたのですが、もう少し＊＊の部分を補足いただくと～」という形が楽かも知れない。真剣に質問しちゃうと、逆に発表者を立ち往生させることにも…。

編集後記

「ＰＣの中のファイルを見られましたか？」「見てないぞ、そんなもの」「去年のプログラム、お持ちですか？」「持ってないぞ、そんなもの」◆そんなもの…という失礼な発言を繰り返しつつ、着任以来に取り組んだ言語表現学会の担当。多くの方々に御迷惑を掛けたに違いない。この場を借りて、お詫びする次第である。◆さて、今回の研究発表会を終えて、何か会員の方々にお届けできるものはないかと考えた。「会報」のようなオフィシャルなものではない。しかし、「お便り」というのも何だか…。落ち着くところは「研究発表会通信」であった。勿論、「仮題」である。◆編集委員の吉田先生にもカメラマンとして働いていただいた。求む、記録カメラマン！　秋の学会で協力して下さる方を、現在、小さな声で募集中！（雪）